

アゲハの身体に覆い被さっていたのは——巨大な昆虫だった。

巨大と言っても、四〇五センチ程度の大きさではない。ざっと見ただけでも二メートルはあるのではないかと思わせる、圧倒的巨大大さだ。此処まで巨大な昆虫、いや陸生節足動物は、人類が生まれる何億年も前にしかない。

ましてや蠅のような、空を飛ぶために体重が軽い必要がある昆虫で、ここまで巨大な種などあり得ない。

しかしその生物には羽があり、六本の足があつて、複眼を持っていた。ずんぐりとした体型と、身体中から毛を生やしている姿は正しく蠅としか言えない。ギリギリと奇妙な鳴き声を出している口は、まるでスタンプのように平坦だ。こんな口を持っているのは、蠅しかない。

つまるところ、あり得ない存在がアゲハの眼前を埋め尽くしていたのである。「な……何、っ！」

目の前に迫った巨虫に驚き思わず身を振った、瞬間、巨大蠅はアゲハの腕に乗せている自らの足に力を込める。巨大蠅の足先には棘状の突起があり、押し付けられるとそれが肌に刺さった。貫通するような鋭さではないが、強く押し付けられるとかなり痛く、アゲハは身動きを止めてしまう。

仮にこのまま暴れたとしても、上手く逃げ出せたかは分からない。アゲハが動こうとするや拘束を強めた事から、逃げるために暴れば巨大蠅は更に力強く押さえ付けようとするだろう。もしかすると跡が残るような傷を付けられるかも知れない。迂闊な抵抗は、自分の身体を痛め付けるだけだ。

尤も、そんな考えなど抱かずに、アゲハは再度の抵抗をやろうとはしなかった。何故ならアゲハは見惚れてしまったのだから。

自分を押し倒した、目の前の怪物に。

(か、かか、か、カッコいい……！)

顔を赤面させ、胸をキュンキュンと鼓動させながら、アゲハは巨大蠅をまじまじと見つめる。

そう、アゲハは美醜の概念が常人とは真逆なのだ。常人が目当たりにすれば

正気を削り取られるようなおぞましい外観も、アゲハにとっては世界最高峰の美形。今のアゲハの状況は、例えるならあらゆる女性を虜にするイケメンに押し倒されたようなものなのだ。

とはいえ、アゲハは美醜の概念こそ狂っているが、貞操観念までは逆転していない。好みの人物と出会えたからといって、そこでいきなり服を脱ぐのはただの変態だ。アゲハは決して、変態などではない。

故に蠅の中足がスカートを引っ張り始めた時、アゲハは猛烈な恥ずかしさを覚えた。

「やっ！？　ちよつと…：…そんな、す、スカート脱がさない、づっ！？」

慌ててスカートに手を伸ばそうとして、しかし巨大蠅はそれを抵抗と見做したのか前足で押さえ付けてくる。棘が刺さり、痛みからアゲハの手は途中で止まってしまった。

抵抗虚しく、アゲハはスカートを脱がされてしまう。下半身を包んでいた衣服が一枚失われ、下着として履いている淡い水色のパンツが露わとなった。露出した肌面積は広がったが、涼しさなど感じない。むしろアゲハは羞恥から顔を真っ赤にし、全身が火照っていくのを感じた。

しかし巨大蠅はアゲハに身悶えする時間を与えてはくれない。

自由な中足が次に狙ったのは、アゲハのパンツ…：…いや、その布によって守られた、乙女の秘部だった。

「ひゃうんっ！？」

不意に触られ、漏れ出る甲高い声。

アゲハとて高校生。自慰経験の一度や二度はある。しかしそれはあくまで自分の手でやってきたものだ。下着越しであろうとも、誰かに触らせた事など一度もない。

動き、タイミング、強さ…：…全身を駆け巡るぞわぞわとした感覚を我慢しようにも、予想の付かない刺激はまるで事ある毎に不意を突くよう。

「あっ！　ん、く、んあ、ひうっ！？　や、あっ！」

自然と喘ぎ声が漏れ出てしまい、虫の動きに合わせるかのようなリズムは、傍目には誘っているようにも見えるだろう。

そんな自分の動きと声に気付きてしまったら、アゲハは恥ずかしさから顔が茹

ったように熱くなるのを感じた。いや、熱くなったのは顔だけではない。下腹部も疼き、湿り気が帯びてきた事も感じ取れる。ねっとりとした汁が溢れ、下着を濡らしていく事が肌の感覚で分かってしまう。

いくら『イケメン』の手責めに遭っているとはいええ、こんな簡単に濡らすなど、まるで売女ではないか。

(わ、私、こんな破廉恥な……！)

自らの痴態を恥じるも、生理反応は止められない。巨大蠅の愛撫も終わらない。性感は高まり続け、身体の火照りは加速していく。

「い、んくう……っ！」

やがてアゲハは、軽めではあるがオーガズムに達してしまった。膣穴から愛液が溢れ出し、おもらしでもしたかのように下着を濡らす。ピクピクと全身が痙攣し、快感が精神を蝕む。

心身共に隙だらけ。

巨大蠅はこのチャンスを待っていたかのように、素早くアゲハのパンツに前足を伸ばした。絶頂の余韻に浸っていたアゲハは、蠅の行動への反応が遅れてしまう。そもそも手足の拘束は弛んでないため、どうにもならない。

ついに、アゲハは下半身の衣服を全て剥ぎ取られてしまった。

露わになるヴァギナは愛液でべっとりとしり、未だ快感の余韻に浸るようによく刻みに震えている。淫靡な魅惑を放つ生殖器を目の当たりにした巨大蠅は、興奮を表すように大きく仰け反った。

その際、一瞬だけだが蠅の下腹部がアゲハにも見える。

故にアゲハは目撃してしまった。蠅の下腹部から、人の腕ほどの太さの『肉塊』が生えている姿を。

それは赤黒く、脈動していた。体液だと思われるどろどろとした透明な液体を纏い、滴る粘液が糸を引いている。一見して熱せられた鉄のようにも見えるそれは、腐った魚のような生臭さを漂わせていた。

アゲハは息を飲んだ。言うまでもなく、アゲハにはこの巨大蠅の生態に関する知識などない。だからその肉塊がどんな役割を果たすのか、どんな機能を持っているのか、そんなのはさっぱり知らない事である。

しかし今、肉塊は露出したアゲハの膣穴を狙うように切っ先を向けているのだ

——ならば用途はただ一つ。

生殖だ。

「あ……っ！」

気付いた瞬間、アゲハの心臓が激しく脈打った。

蠅から伸びているものが生殖器だとしたら、かの生物はアゲハに発情、いや、求愛している事になる。言い換えれば、それは愛の告白も同然だ。

無論普通の人間ならば、蠅から求愛されても嫌悪しか湧くまい。しかしアゲハからすれば『好みのタイプ』からの愛の告白である。差し向けられた肉棒も、彼女の目には神秘的なオブジェクトにしか映らない。

嫌悪なんて、考えすら浮かばなかった。

【ギギギギギ】

「あ、う……う……う……！」

情熱的な『言葉』を掛けられ、アゲハは赤面してもじもじしてしまふ。

一時の興奮に身を任せ、身体を重ねてはいけないと思う。されどこうも愛をぶつけられたなら、それに応えないのも申し訳ない気持ちになってしまう。加えて肉体的に成熟し始めた年頃であるアゲハは、少なからず性的な事への関心があった。

何よりこんな『美形』、逃したら間違いないもう二度と出会えない。

心の天秤が理性ではなく欲望の側に傾くまで、そう時間は掛からなかった。

「……ん……良い、よ……んあっ」

アゲハは許しを示した、瞬間巨大蠅の生殖器がアゲハの膣穴に宛がわれる。まるで人語を理解するかのようなタイミングに、アゲハは一層ときめく。最早、アゲハの心から抵抗は消えていた。

「私の初めて、もらってください……♪」

アゲハは自ら股を開き、淫靡に微笑みながら『男』を誘う。

巨大蠅が躊躇する事はなかった。

勢いよく腰を突き立て、巨大蠅は自らの生殖器をアゲハの中へと突き入れる！

「んぎいっ!？」

ぶちりと肉が切れる音と共に走る激痛に、アゲハは苦悶の声を上げた。

初めては痛い、という話は本などで読んだ事がある。しかし予想していたより

もずっと痛い。人によって痛みには差があるとも聞いたが、自分はかなり痛む方なのではないかと思えてくる。実際ならだと、アゲハの膣からはかなりの量の鮮血が溢れていた。

そんな破瓜の痛みが引かないうちに、巨大蠅は腰を激しく動かし始める。

「あぐ！？ い、痛、痛い！ 痛いっ！」

あまりの痛みに、アゲハは悲鳴混じりの声を上げる。しかし蠅の交尾は激しさを変えない。がむしゃらに、自分勝手に、巨大なペニスを膣奥目指して突き立てるのみ。初々しい肉壺はペニスによって無理やり耕され、それが処女膜のあった場所の傷を押し広げているのか、痛みは引くどころか酷くなる一方だ。

こんなの愛あるセックスじゃない、これではただの動物の交尾ではないか。

無論アゲハとて、巨大蠅が人間に値するほど聡明だとは思っていない。しかしアゲハは巨大蠅に一目惚れをしてしまった。恋は盲目だ。例え幻想であると分かっているとしても、つい夢を信じてしまう。

もっと優しく、もっと切なくて、もっと熱くなるような……そんなセックスがしたかったのに。

「もう！ こんな乱暴なのは嫌っ！ ちょっと落ち着いて……」

感情的になったアゲハは、先程までの受け入れ体勢を一転。足をばたつかせ、巨大蠅を押し退けようとする。あくまで一度落ち着かせるためで、完全な拒絶ではないのだが、果たして巨大とはいえ蠅にそれが理解出来るのか。

抵抗を受けた巨大蠅はアゲハを強引に抑え付け——ない。

代わりにそのおぞましい頭部に付いている、グロテスクな口器をアゲハの口に接してきた。

「んぶ！？ ん、んう……！」

突然口を塞がれ、アゲハは驚きで目を白黒させる。身も振った……しかしすぐに、大人しくなる。

口と口をくつつける行為。

それは正しくキスであった。大半の乙女ならば嫌悪のあまり吐き気の一つも催すだろうが、『彼』への恋慕を抱いているアゲハにとって、このキスは情熱を感じさせてくれた。胸がキュンキュンと音を鳴らしているように感じ、暴れていた手足が止まってしまう。我ながらちよろいとは思うものの、胸が熱くなっていくの

を止められない。嫌悪が薄れ、膣に走る痛みの中の温かさに気付いてしまう。さながら王子様のキスを受け止める姫君のように、アゲハは目を閉じ、巨大蠅との接吻を受け入れる。すると巨大蠅の口から液体のような物が染み出し、唇を濡らしてきた。

（あ、なんか出てきた……涎、かな……）

アゲハは液体の存在に気付くと、それを舐め取り、飲み込む。理由は特にない。性的な興奮が高まったからか、無意識にそうしていた。

ちゆるちゆると音を立てながら、アゲハは楽しむように、夢中で蠅とのキスを続ける。

——その瞬間は唐突に訪れた。

「……ぷはあ、はあ、ん、んんっ！」

今まで優しくしていたキスを、アゲハは段々と激しくしていく。貪るように舌を絡ませ、飢えるように蠅の涎を飲んでいく。

そしてその顔を、熟れたリングゴよりも赤くしていた。

（あ、熱い……熱い、熱い熱い熱い！）

全身で込み上がる、感じた事のない熱。

このままでは身体が燃えてしまうのではないか、そう思わせる高熱にアゲハは身悶えする。汗が噴き出すようになってきて、服が濡れていく。それが堪らなく気持ち悪くて、アゲハは掻き毟るように服を掴み、荒々しく脱いでいった。ブラジャーなど破り捨てる。すっかり裸となり、汗で濡れた肌が外気に触れるが、それでも熱さは収まらない。むしろどんどんと増していった。

何より、疼くのだ。

異形の肉棒が突き刺さり、大きく押し広げられている膣穴が。

「ん、んくあ、はあ、はあ、はあ！ な、何、これえ……！？」

口付けを止めて冷たい外気を吸い込むが、身体が冷える気配はない。アゲハは自然と腰をくねらせ、肉棒と膣肉を擦り合わせる……しかしまるで物足りない。もっと抉るような激しさで、もっと奥を突いてくれないと、この疼きは、終わらない。そしてそれは、自分の力だけでは叶わない。

「お、お願い……突いて……」

アゲハは恥ずかしさを抑えながら、ぼそりと懇願する。

【ギギギギギ……】

しかし巨大蠅は、まるで人間のようには首を傾げるだけ。

それが意地悪なのか、何か考えがあるのか、或いは本当に意味が分かっていないのか。アゲハには分からない。

一つ間違いないのは、もう、身体を蝕む疼きに耐えられないという事だけ。

「突いてっ！ 乱暴にして良いから、だから早く」

アゲハは助けを求めるように叫んだ。

瞬間、ズドンッ、と腹の奥底に衝撃が走る。

「——おっ……おく……？」

身体が浮かび上がり、息が止まる。突然の刺激にアゲハは息が詰まり、頭の中が真っ白になってしまった。

それでも無意識に視線を、自分の下腹部に向ける。

アゲハは見てしまった。本来真っ平らである筈の自分の腹が、ぽっこりと膨れ上がっている姿を。

体験版はここまですりなります